



◀ 11 ▶

同楽会 ジョークサロン

文・大濱記子記者
写真・小室和寛カメラマン

「おもしろい」と「表現し合う」

夕 闇が色濃くなり始めた午後六時半。東京・千代田区の社会教育会館の一室にぼっと明かりがついた。書類バッグを手にした会社帰りのサラリーマン、OLが靴を脱ぎ、和室に上がり込む。「こんばんは」。十五畳ほどの部屋にはすでに、数人のメンバーが集まっていた。口の字形に並んだ机の空間が次々に埋まってくる。参加者は十三人。それぞれが持ち寄った作品のコピーを配る。「同楽会ジョークサロン」(野本浩一代表)の定例会が始まるうとしていた。

ジョークサロンは、平成元年(株)ライオン商事の元社長、故山下広蔵氏の呼び掛けで発足した。川柳、タジャレ、都々逸、語呂合わせ……。笑いのジャンルは問わない。日常生活の中で、「おもしろい」と感じたことを得意な表現方法で作品にし、月一回、第四水曜日の夜に開かれる定例会で発表する。現在、全国に約三百人の会員がいる。もちろん、全員が定例会には参加できない。そのため、会報「伝笑鳩」を発行し、メンバーの作品を紹介しながら笑いの輪を広げている。「会が求めているのは、人を元気にする笑い、温かく包み込む笑いです。会報を読むだけでもOK。作品がなくても結構。ユーモアを楽しむ心を何よりも大切

にしています」と野本さんは言う。その言葉を証明するかのようには、会には規約がない。年会費もない。定例会の参加費はわずか五百円。その費用で軽食を買い、空腹を紛らわす。あとは仲間のジョークが腹を満たしてくれる。入会が自由なら退会も自由。ここに、「笑い」を求め、主に東京近郊の在住者、都内に勤務するメンバーが集う。埼玉県岩槻市に住む辻恭子さん(五十八)は、友人に誘われ四年前に入会した。毎月、参加費よりも高い交通費を払い、家事をやり繰りし、片道一時間半ほどかけて通っている。これまでにいろいろなカクチャー教室に通ったが、続けているのは、会費の安いプールとリズム体操、そしてジョークサロンだ。「ここでは、自分の感じたことを自由に発言できる。作

品の出来なんて重要じゃないから、発表するチャンスは、だれにでもある。そんな場所って今までにはありませんでした。つまらなげや、「わーあ、くだらない」でいいし、おもしろければ大声で笑う。皆、人によく見られよう、なんて思っていない。気負う必要もない。そんな気楽さが気に入っています」。人が「おもしろい」と感じる事柄に基準やマニュアルはない。だから、ジョークサロンには講師がない。テーマもない。それぞれが、独特のユーモアのセンスを作品にし、順番に発表していく。仲間が一月かけ練り上げた自信作にじっと耳を傾ける。その合間にも、スキあらば受けを狙ってタジャレを飛ばす。揚げ足を取られても、負けない。ジョークの応酬にまた笑いがわく。



←
人がいるから笑いが起こる。笑いがあるから人が集う。ほかに何も無い。その気楽さの中で、メンバーはひとときの安らぎを味わう。

笑いは 和 来

心のバランス保つユーモア

印 南博之さん(六〇)映像関係会社社長

長は、こうした言葉のキャッチボールに魅力を感じている。仕事柄、付き合いは広い。だが、自分のジョークに反応してくれる相手はなかなか見つからない。笑いを共有し合うまでの人間関係を築くことは容易ではない。「自分が考えたネタを聞いてくれて、喜んでくれる人がいる。そして相手もジョークを返してくる。そのやりとりが、より楽しい笑いを生み出すんです」と。印南さんは翌早朝、出張だった。体を休める時間を割いても定例会に顔を出す理由がそこにある。

笑いは、つかの間でも嫌なことを忘れさせてくれる。しかし、長引く不況の中では、「笑うに笑えない」というのが現実だ。

曾田英夫さん(四八)は損保会社の管理課長を務める。火災や自動車事故などが起きると、顧客と折衝しながら保険金を支払うのが曾田さんの部門の仕事だ。精神的な負担は大きい。不景気な世世がさらに追い打ちをかける。「せめて職場だけでも明るくしたいと、ダジャレを飛ばしています。そうじゃないと、職場の雰囲気はなかなか明るくなりませんか」と声を低くした。

「突然に首都圏までも大雪で、動きがさかん交通機関」「律儀者の子だくさん」
↓律儀者のコピーだくさん

日常のふとした事柄を題材にした曾田さんの作品は、ほのぼのと温かい。「自分がおもしろいと思っても、皆が笑ってくれない時もある。逆に、自分と同じ題材で、『こんな使い方もあったか、やられた』と思うこともある。物の見方に幅が出ます」。ジョークのセンスを磨いた甲斐あって、職場にはいつも笑いがある。「設立者の山下さんが生前、こう言っていました。笑いは『和来(わらい)』であり、人と人の和を呼ぶんだと。その通りだと思えます」。曾田さんは確信している。

メンバーたちの作品の題材には、社会

問題に視点を当てたものも少なくない。「汚職防止・検察庁と大蔵省を統合する」「行革本部」「やたらチヨウチヨムカつくキル すぐに飛びだすバタフライ」待てばワイロの日和ありー収賄官吏」

定例会の席で、こういった作品が発表される。座は、ワッと盛り上がる。ニヤリと笑うこともある。社会の歪みを快く思っていないのは、皆、同じだ。

西欧には、「ユーモアはマジメさの唯一の証拠である」という古い諺があるという。真面目に、全うに生きていくからこそ、不正が分かる。真実と現実のギャップに気づく。腹は立つが、そこをユーモアに変えて笑い飛ばすことで、辛くも世の中を受け入れていく。

高木正明さん(六〇)の作品にも、社会を辛辣に批判したのが見られる。それは、毎日の通勤電車の中で生まれる。車両の中で約一時間、高木さんは新聞にくまなく目を通す。吊り広告のチェックも欠かさない。使えそうな言葉、おもしろい言葉を胸ポケットに忍ばせた手帳に素早く書き込む。そうして一カ月に生まれる作品は百を優に超える。「ジョークを作ることは、全然、苦にならないですね。むしろ、楽しい。自分なりに心のバランスを保っているのかもしれないね」と言う。

高木さんは、設計会社に勤める。一日中、コンピュータに向かい製図を描く。十時間以上も機械と格闘する日々が続く。キーボードに触れる指先に痛みが走るほどだ。その間、だれとも言葉を交わさない日もある。「注文だって、電子メールで送られているんです。自分でメールを読んであとは製図するだけ。話す必要がないんです。笑うことなんてほとんどない。さすがに、気の滅入る時がありますよと苦笑する。ジョークサロンは、高木さんにとって、作品を発表する場であるとともに、気分転換を図る場でもある。

笑

にさまざまな境遇に生きる人々が、ジョークサロンに集っていた。交換した名刺を見て驚く。取締役、部長、課長、主務……。屈託のない笑顔を見せ笑っている人たちは、職場に戻れば、皆企業の中核を担う人たちばかりだ。業績の向上、部下の育成、利潤の追求……。果たすべき役割は数えきれない。そして、家に戻れば、守るべき家族がいる。課せられた荷は決して軽くはない。そんな現実を正面から受け止めながらも、どこか無意識のうちに、肩の力を抜ける場所を求めているのではないだろうか。

薬局の店長を務める小田明子さん(40)は言う。「社会に出れば、それぞれの立場で考えることがいっぱいありますよね。それも間違っていない。けれど、どこかで息を抜かなくちゃ心が病気になるてしまう。ここでは、肩書なんて関係ない。職場のことも話題にならない。ありのままの自分でいられる場所なんです。素直になっと思いきり笑って帰る。夜更かしして体は疲れているのに、不思議と心は元気になります。明日もまた頑張ろう、って思えるんです」。

「いろんな世界を持った方がいい」と小田さんは諭すように言った。「七十歳になった時の自分を想像したことがありますか？ 仕事一途でいて働く場所がなくなったらどうするの？ そんな時、『まだ私にはこれがあった』と思える居場所があるってことは大事なことですよ」。

人はいつでもだれかとつながっていることを実感したいと思い、生きている。「素」のままの自分をさらけだせる場所が、家族のほかにもあったら、どんなに心が安らかだろう。

大空を悠々と渡る鳥も、羽を休めずに飛び続けることはできない。人間も同じだ。「同業会ジョークサロン」は、「笑い」を大切に作る仲間にとって、家庭とは違うもう一つの「巣」のような存在だ。ジョークで笑い合つのに、肩書も学歴も関係ない。笑いは、ありのままの自分を優しく受け入れてくれる。その安心感と、笑いを共有できた喜びが人と人との絆を深めていく。そつた結びつきこそが、生きる上で重要であることを、メンバーたちの笑顔が教えてくれる。

"素"のままの自分でいられる